

氏 名	あり みつ な み 有 光 奈 美
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 368 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	日・英語の対比表現と否定のメカニズム ——認知言語学と語用論の接点——

論文調査委員	(主 査) 教 授 山 梨 正 明	教 授 服 部 文 昭	教 授 壇 辻 正 剛
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語の対比表現と否定表現のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。全体は6章から成る。

第1章では、対比表現と否定表現の分析の基本的な枠組みとなる認知言語学の方法論と認知言語学のパラダイムの背景となる基本概念の説明がなされる。

第2章では、日本語と英語における明示的な対比表現と否定表現に関する具体事例が検討される。特に本章では、肯定・否定に基づく対比表現、否定接頭辞、準否定語、擬似否定性を有する接辞、二重否定文、部分否定文、等の形態・統語論的な分析と意味論的な分析がなされる。

第3章では、日常言語における非明示的な否定文について分析がなされる。本章では、明示的な否定辞を用いることなしに、対比表現を使用することにより否定性を表現する言語現象が分析の対象となる。ここでは特に、否定文脈に現れることができ肯定文脈には現れることができない日・英語の否定極性項目(negative polarity items, 以下NPI)の用例の分析がなされる。従来の研究では、肯定文脈に現れることができないNPIの用例は、否定極性現象の単なる反例として扱われている。これに対し、本章では、この種の極性現象に関し、間接的に否定的文脈を誘引する意外性、聞き手の信念への否定的共感、等の要因の存在を明らかにし、この種の要因が、表層レベルにおける肯定文脈においてもNPIが生起する事実を一般的に説明している。

本章では、さらに空間認知と身体的経験に根ざす言語的な概念の発現の視点から、日常言語の否定概念の解明を試みている。日常言語の否定性は明示的には *not*、「ない」等の否定辞によって直接的に表現されるが、実際の言語伝達の文脈においては、さらに空間認知や運動感覚の比喩性に根ざす間接的な否定表現が広範に使われている。その典型例としては、「～外」(e.g. 「問題外」), 「～を越えている」(e.g. 「理解を越えている」), 「～に欠けている」(e.g. 「認識に欠けている」), *beyond* ～(e.g. *beyond understanding*), *far from* ～(e.g. *far from true*) などの表現が挙げられる。本章では、この種の表現の間接的な否定性は、空間認知と運動感覚にかかわるわれわれの経験を基盤とする内-外(in-out), 遠-近(far-near), 中心-周辺(center-periphery), 充実-欠如(full-empty), 等のイメージスキーマの比喩性を介して誘引される事実を明らかにしている。また、この種の間接的な否定性を比喩的に誘引するイメージスキーマの集合のどの部分が日・英語、等の個別言語を越えた普遍的なスキーマであり、どの部分が各言語に固有のスキーマであるかを、対照言語学的な視点から検討している。本章では、この視点から興味深い事実として、内-外, 遠-近, 中心-周辺のタイプのイメージスキーマに基づく否定性は普遍的な可能性が高く、充実-欠如(full-empty)のイメージスキーマに基づく否定性は語源的に日本語の否定性の意味には関係しているが、少なくとも英語をはじめとする印欧語の抽象度の高い否定辞との関連性は認められない点を明らかにしている。本章では、さらに人間の主観的な価値判断に基づく反義関係を中軸とする対比表現(e.g. 良-悪, 優-劣, 有能-無能, 多-少, 親-疎, 等)にかかわる対比表現の意味の肯定性/否定性の概念を綿密に分析し、この

種の対比的な概念が、人間の空間認知や空間知覚の経験を基盤とする前－後、上－下、高－低、広－狭、深－浅、等のイメージスキーマの比喩性から派生するプロセスを、認知言語学の問題メタファーのモデルによって定式化している。

第4章では、語用論的な視点から、発話行為の否定的な機能にかかわる言語現象として、日・英語の禁止、拒否、否認などの否定的な発話行為のメカニズムの一面を明らかにしている。特に本章では、禁止のメカニズムにかかわる発話行為の具体事例として、明示的な命令文による禁止（e.g. *prohibit*, 「禁じる」）、思考・態度表明の動詞の使用による禁止（e.g. *oppose*, *object*, *reject*, 「反対する」、「拒否する」、「断る」、等）による発話行為の否定的遂行のメカニズムを、オースティン、サールの発話行為論とグライスの会話の含意を中心とする語用論の枠組みに基づいて分析している。言語レベルの区分からみた場合、前章までの否定性に関わる言語現象は、語彙レベル、句レベル、文レベルまでの（反義、矛盾、等にかかわる）意味論的な要因ないしは概念的な要因によって特徴づけられる言語現象である。これに対し、本章で分析の対象とする禁止、拒否、否認、等にかかわる言語現象は、文レベルを越える発話行為のレベル（ないしは発話の遂行レベル）にかかわる否定性の問題である。これまでの伝統文法、記述文法、生成文法に代表される言語研究では、語彙レベルから文レベルまでの（字義通りの否定の意味を含む）概念的な意味規定は試みられているが、文レベルを越える発話の否定的な遂行機能のメカニズムの考察はなされていない。本章は、語用論的な射程を考慮に入れた拒否、否認、等にかかわる言語現象の綿密な分析を通して、従来の語彙中心（ないしは語句中心）の意味研究と文中心の意味研究の方法論的な限界と言語事実に関する分析対象のスコープの限界を指摘している。

第5章では、論理学とレトリックの観点からみた間接的な否定表現と修辭的な否定表現の考察がなされる。特に本章では、推論による断り表現、否定的な誇張表現と婉曲表現、アイロニー、嘘、ルーストーク、等にかかわる発話行為の遂行的機能と否定的な意味を間接的に伝える修辭機能を分析し、これらの表現から誘引される否定的含意の特性と修辭機能の違いを明らかにしている。この種の言語表現のうち、特にアイロニー、嘘、誇張に代表される言語表現には論理的に偽の命題がかかわっているが、これらの表現は、偽の命題の了解が聞き手の前提となっているが、聞き手から隠蔽されているか、聞き手に対し主張されているかの本質的な違いが認められる。本章では、日常言語の論理的側面と修辭的側面の双方の観点から、否定性がかかわるこの種の言語表現の伝達機能の違いを明らかにしている。

最後の第6章では、理論面・実証面の双方の観点からみた対比表現と否定表現の記述と説明に関する本研究の意義と一般的な展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語の対比表現と否定表現のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。理論言語学における従来の意味論の研究では、形式意味論、生成語彙論、等にみられるように、意味分析に際し、言語主体とは独立した抽象的な意味標識による属性規定が試みられるにとどまり、対比表現や否定表現に関し、言語主体と外部世界の相互作用を反映する身体的な経験に基づく意味分析はなされていない。本論文は、後者の身体論的な視点に基づく対比表現と否定表現の実証的研究である。

否定に関する従来の研究の大半は、明示的な否定表現の分析が中心になっており、非明示的な否定表現や対比表現をも含むより包括的な否定現象に関する体系的な研究はなされていない。本論文の独創的な点は、明示的な否定表現のメカニズムだけでなく、従来の研究で等閑視されてきた非明示的な否定表現のメカニズムを、空間認知、イメージ形成、イメージスキーマ変換、等がかかわる言語主体の認知的な要因と語用論的な推論にかかわる要因に基づき体系的に分析している点にある。

本論文で注目すべき点は、明示的な否定辞を用いることなく否定性を表現する言語現象に関し、語用論的な推論に基づく一般的な説明を与えている点にある。従来の研究では、明示的な肯定文脈に現れる否定極性項目の用例は、否定極性現象の単なる反例として扱われている。これに対し、本論文では、この種の極性現象に関し、間接的に否定文脈を誘引する意外性、聞き手の信念への否定的共感、等の語用論的要因の存在を明らかにし、この種の要因に基づいて、肯定文脈において否定極性項目が生起する事実を説明している。これまでの言語学の主要な意味論の枠組みである形式意味論、認知意味論のいずれの分析においても、非明示的な否定極性現象に関するこの種の一般的な説明はなされていない。

次に本論文で注目すべき点は、(i)日常言語の否定概念の一部が、空間認知と運動感覚にかかわる言語主体の経験を基盤と

する内-外 (in-out), 遠-近 (far-near), 中心-周辺 (center-periphery), 充実-欠如 (full-empty), 等のイメージスキーマの比喩的拡張によって発現する事実を明らかにし, (ii)この種の間接的な否定概念の発現を可能とするイメージスキーマの集合のどの部分が日・英語, 等の個別言語を越えた普遍的なスキーマであり, どの部分が各言語に固有のスキーマであるかを対照言語学的な視点から検討している点にある。一般に否定の概念は, 言語の論理的な意味にかかわるプリミティブな概念として存在することが前提になっており, この種の概念の根源性は, 言語研究において問題にされていない。これに対し, 本研究は, 空間認知と運動感覚にかかわる内-外, 遠-近, 中心-周辺, 充実-欠如, 等のイメージスキーマの観点から, 日常言語の否定概念の発現過程を解明するための検証の場を提示している点で重要な意味をもつ。

また本論文は, 日常言語の意味的 (ないしは論理的) なレベルの否定概念だけでなく, 禁止, 拒否, 否認などの発話行為を介して誘引される語用論的な否定概念の特性を明らかにしている。本論文で明らかにしている禁止, 拒否, 否認, 等にかかわる否定性の問題は, 文レベルを越える発話行為のレベル (ないしは発話の遂行レベル) にかかわる語用論的な否定のメカニズムを明らかにしていく際に重要な役割をになう。これまでの伝統文法, 記述文法, 生成文法に代表される言語研究では, 語彙レベルから文レベルまでの (字義通りの否定の意味を含む) 概念的な意味規定は試みられているが, 本研究にみられるような文レベルを越える発話の否定的な遂行機能のメカニズムの分析はなされていない。本研究の貢献は, 実際の伝達文脈における発話行為にかかわる拒否, 否認, 等の否定現象の緻密な分析を通して, 従来の語彙中心 (ないしは語句中心) の言語研究を, 語用論研究の射程にまで研究のスコップとして拡大している点にある。本研究は, さらにレトリックの観点からみた否定現象に注目し, 推論による断り表現, 否定的な誇張表現と婉曲表現, アイロニー, 嘘, ルーストック, 等の否定の修辞機能を分析し, これらの表現から誘引される否定的含意の特性と修辞機能の違いを明らかにしている。本論文は, 否定の研究を, 文法レベルを越えるレトリックの視点から考察している研究としても注目される。

本論文で明らかにされた否定のメカニズムは, 思考, 推論, 判断にかかわる人間の基本的な認知能力のメカニズムに関係している。この点で, 本論文の研究成果は, 日常言語に基づく人間の論理的な思考能力と推論能力の発達過程の解明をめざす関連分野の研究への基礎的研究としても重要な役割を担う。また, 本研究は, 共時的な観点からみた日常言語の否定現象に関する研究であるが, この研究成果は, 通時的ないしは歴史的な観点からみた否定概念の意味変化の研究への基礎的研究としても注目される。

本研究は, 次の点で, 従来の理論言語学の意味分析を越える実証的な分析を試みている。第1に, 言語データに関し, 作例だけでなく, 会話コーパスやシソーラスを用いて言語事例を体系的に収集・分析し, より信頼性の高い結果を出している。第2に, 否定表現と対比表現の意味の発現と変容のプロセスを, 認知言語学の枠組みに基づく認知図式, 比喩的マッピング, イメージ変換, 等の記述装置により明示的に定式化している。第3に, 否定現象を単に意味レベル, 概念レベルの問題として分析するだけでなく, 語彙化と文法化のプロセスにかかわる形態論と統語論の問題との関連で分析するとともに, 発話行為の語用論とレトリックの視点から分析し, 狭い意味での文法論を越える新しい言語研究の方向を示している。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは, 言語, 知覚, 思考, 推論, 等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが, 本研究は, この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に, 今後の言語学と認知科学における関連分野への貢献がさらに期待される。

よって本論文は博士 (人間・環境学) の学位論文として価値あるものと認める。また, 平成19年1月30日, 論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。